

21世紀のオリンピズム構築のための基礎的研究

Fundamental Studies for Reconstruction of Olympism in 21. Century.

山 本 徳 郎

Tokuro YAMAMOTO

はじめに

この研究は、オリンピズムという概念を中心に据えながら、しかも西欧中心のオリンピック研究に対して、これを相対化するオリンピック後発国からの視点を提供する点に特色がある。オリンピックが西欧文明の拡張主義の一形態であり、西欧化の要因として機能してきたことは、わが国のみならずオリンピック研究者の国際世論においても、しばしば指摘されており、スポーツのグローバル化を今後、どのように方向づけていくべきかについて諸説が提起されてきたが、いずれも現実問題への関心に振り回されている傾向がある。この研究によって、オリンピズムという概念が20世紀文明化過程が生み出した人類共有の新しい価値観となる可能性があることを明らかにすることができる。

具体的には、オリンピックの推進あるいは批判に関わるさまざまな思想・言説を歴史事実として捉え、その史料を収集・整理し検討することにより、21世紀におけるスポーツの新たな統合概念としてのオリンピズム構築の理論的基盤をさぐることを目的とする。

この研究の手始めとして、今年度はクーベルタン研究者清水重勇氏に学びながら、近代オリンピックに関係する「オリンピズム」を検討した。

20世紀はスポーツの世紀といわれるくらい、スポーツ、特に競技スポーツが隆盛を極めた。周知のように、それを促進したエネルギーは、1896年に始まったオリンピックであったと言えよう。近代オリンピックの提唱者であったクーベルタンの残した有名な言葉に「オリンピックは勝ことではなく参加することだ」というのがあるが、そこには20世紀の前半にすでに見られたすさまじい勢いで進むオリンピック(スポーツ)の競技化へのクーベルタンの懸念が示されていた。講師の清水氏は、長年フランスの体育(スポーツ)史を研究してこられた。特にフランスの近代教育の歴史の中で、クーベルタンが如何にしてオリンピックを提唱するにいたったか、そこにどのような思いを込めていたのかを丹念に調べ、学位論文を完成された。そこには21世紀のスポーツを考えるうえで貴重な提起が存在すると考え、彼を講師とする研究会を計画した。研究会で話して頂いたテーマは「21の世紀オリンピズム・・・? クーベルタンに訊く」であった。

なお、オリンピズムとはあまり耳にしないであろうが、これは単なるオリンピック主義ということではなく、21世紀の体育やスポーツ等、身体文化、運動文化にかかわる領域の総称となる可能性を秘めている用語ではないかと考えている。

研究会は平成15年11月27日午後3時から大学院講義室で行われた。約2時間にわたって清水氏からの資料にもとづく「21世紀のオリンピズム・・・？ クーベルタンに訊く」というテーマの話しと、それにたいする質疑応答がなされた。

なお、清水重勇氏は神戸大学名誉教授で、最近の論文、著書としては次のものがある。

- ・近代体育とクーベルタン：体育学の教育思想史、体育学研究46巻3号、2001年
- ・スポーツと近代教育—フランス近代体育思想史一、紫峰図書、1999年（博士学位論文）

研究会終了後、清水先生は講演内容を、下記のような原著的論文にしてお送りいただきました。ここにその全文と、更に先生の講演を聴いていた小石原美保氏（2月研究会講師）の感想を掲載する。

21世紀のオリンピズム・・・？ クーベルタンに訊く 清水重勇

20世紀の変わり目から21世紀の変わり目へ

概念とは、その量を目盛りで計れるたぐいものではないけど、《世界》、《世紀》といった言葉を口にする人は、きめ細かな使い方もあるが、まずたいていの場合、大きいとか長いといった量的な意味をこめるものだ。どちらも一人の人間にとって、果てしない量だけど、何かしら境目がある完結した時・空間というニュアンスがある。個人はそのどこかに属することで生存するしかないのだが、ときに人間は自分の属する時・空間を忘れて境目の果てに旅をする。

人間という概念もまた、とらえ所のない果てしない概念である。人間とは何か？ などという質問は、生物学の知識をたずねているのではないとすれば、本来、答えを求めるべくして発せられるよりも、ほとんどの場合、それは自問のような、モノローグに近い想念、ないしは自己言及でしかない。《私》は人間であり、世界と世紀に属してい

る。多くの場合、情報圏の大小はあるが、世界とはぼくの把握する空間であり、世紀とは私の生きる時間である。世界も世紀もすこぶる自己中心的に把握されているか、さもなければ、内属している自分を捨象して、あたかも他の居場所を持っているかのような口ぶりで語るしかない。「他人の身になって考える」とか、「歴史を相対化する」とか、そういう越境行為のようなことを平気でやってしまうのが人間なのであり、語る者も聞く者も、その根拠が薄弱であることを薄々気づいていながら、互いに大目に見ているようなものだ。

20世紀が終わってしまった今の《世界》には、このようなちょっと自嘲的なもの言いがふさわしいというものだ。しかし、20世紀が始まった時期には、人間も世界も世紀も、おそらく誰の気持ちの中でも、今よりずっと確実かつ切実な願いをほらむ熱い概念だったようだ。世界も世紀も人間も一定の共通感覚をかもし出す概念であったようだ。ヘーゲルの観念論的世界を相対化したマルクスですら、世界と人間に関する言説の自己言及性を「科学的」に極力排除したにしても、物質世界の普遍性を信じていたし、ヤスパースやハイデッガーあるいはメルロー＝ポンティなどが人間の意識や身体と世界の普遍的関係を探求していた。そんな時代に、ピエール・ド・クーベルタンはむしろ、自己言及を究極まで推し進めようとした諦めを知らぬ「懲りない」モラリストだったのである。

この姿勢を彼は生涯つらぬいた。I O C会長の時代もそうであった。1925年会長を辞めてからは「世界教育ユニオン」(Union Pédagogique Universelle: UPU)という組織(といってもほとんど1人)をつくって最後まで頑張り続けた。

さて今や、21世紀は西欧中心の歴史・地理・人間という一般概念に対する懐疑を生み出しながら、スタートしたばかりだが、20世紀初頭、すでに行き詰りに近づいていたこれら諸概念について、クーベルタンは、明確な期待を寄せたのである。彼のオリンピズムを理解するには、時代錯誤のそしりに臆せず、その期待が何であったのかを

明らかにする必要があるだろう。むしろ21世紀が人間や世界について、画期的な進歩をめざす世紀だとするならば、虚心に、古風な人間に学ぶ公正無私の態度があつていいのではないか。「クーベルタンに訊く」という表題はこうした意味をこめてつけてみた。

クーベルタンの《オリンピズム》という思想は、彼の当面の生の延長としての《20世紀》という観念の中で組み上げられた展望を含んでいる。それは未来志向の教育論であると言えるだろう。

クーベルタンのオリンピズムを理解するためにもう一つ留保しなければならないことは、今日のオリンピック競技会をめぐるイベント技術の問題への実践的回答を即座に求めないことである。現代オリンピック競技会のイベントとしての大きな影響力の故に、創始者の手柄をめぐる細かな事実関係がオリンピック研究の中で公表されているが、それは現代オリンピック競技会をめぐるヘゲモニーの利害問題とからむことは免れえず、スポーツの思想研究には無縁のことと承知すべきだろう。とりわけクーベルタンのオリンピズムとは、ほとんど無関係であると理解すべきである。

しかし、もちろん思想研究には現実政治に対して超然たる場が確保されているわけではない。むしろ無関係を装いながらも、その実、最も深い手傷を政治的現実の解釈者という立場から与えようとするのである。

この意味で、IOCは現代オリンピック学のヘゲモニーを確立する機関としてIOAを擁し、そのかたわらに、創始者への敬意を示すためのもう一つの機関、ピエール・ド・クーベルタン国際委員会を抱えることにより、イベント管理者としての権威を補強するのである。

ピエール・ド・クーベルタン国際委員会

クーベルタンの思想を現代によみがえらせようとする一種のオリンピズム教育運動が、つぎのような組織によって担われている。

ピエール・ド・クーベルタン国際委員会（創立

1978年、ローザンヌ)

Le Comité International Pierre de Coubertin

The International Pierre de Coubertin Committee

会長 Paul Martin (1978)

Geoffroy de Navacelle de Coubertin (1979)

Conrado Durantez (1997)

Norbert Müller (2002)

この団体の主要な運動目的は…、

IOC, NOC, IF, NF, 各種競技者団体のための思索・提案の場をめざす

政治指導者に対して、メディア化を強める高度スポーツ競技の逸脱を警告する

《オリンピック文化》を指導・普及させるために、大学と連携する施策を要求する

といったものであり、現在も活発に活動を続けている。

昨今の運動の方針の一つとして各国内にCIPCの支部を組織化するという方針が打ち出されている。…日本にもこれに呼応する動きが生まれることは、オリンピック研究の成果という点ではまあまりのない日本の現状に照らして、ひょっとすると望ましいのではないだろうか。

一例として、前会長のデュランテスが企画した子供向けのオリンピズムの本【当日会場にて回覧】などは、日本でも出版が企画されてよい教育書のひとつであろう。

この団体は、毎年、オリンピズム普及のための一般向け解説書を小冊子のかたちで出版しており、会員には無償で配布している。以下に、その小冊子の一部を参照し、クーベルタンのオリンピズムを考える手がかりとなる言葉を掲げ、清水の解説を加えておく。

オリンピズム

オリンピズムという言葉は一般の辞書にはない。おそらくクーベルタンのIOC会長時代にクーベルタン自身、ないしは当時のジャーナリズムが作り出した言葉ではないかと考える。現代のオリンピック研究ではかなり幅広い意味を含んでい

るようだが、ここでは特に、クーベルタンの固有の意味について解説する。

クーベルタンにとって、オリンピズムとは要するに、文化（教養）と不可分のものであり、《知》と《身体》の歴史的時空における統合的形成を指している。

○ 昔、別れた筋肉と精神が再び正当な結婚で結ばれる。

クーベルタンは論壇にデビューした当初から《身体》という用語を避けて《筋肉》を用いている。これは今日の筋生理学・運動生理学の概念とは遠いけれども、言うなれば《意志の器官》とも言うか、身体の生きて活動する姿を指している。彼は、スポーツ心理学の研究の必要性を早くから説いていたが、この「筋肉」には記憶があると考えていた。20世紀の新体育理論の多くはこうした心理＝運動系としての身体を有力な概念として用いることで精神機能と身体機能との融合領域に体育の仕事を位置づけているが、クーベルタンはその先駆ではないか。「結婚」とは、融合ということを示唆している。

○ (…) どのようなかたちで、またどの程度、芸術・文学が近代オリンピックの祝福に参加できるか、そして、一般に、スポーツ実践に恵みを与え、高めるために協同できるか。(1906年)

人間の精神活動の成果である芸術や文学といった文化領域と筋肉活動の成果であるスポーツとの融合という発想は、クーベルタンのオリンピズムの基本戦略のひとつであった。1906年のパリのオリンピック・コンGRESによって、彼はそれを具体化しようとした。

○ オリンピズムとは体系ではなく精神のあり方である。この精神のあり方は努力の儀式と調和の儀式から生まれる。過剰の好みと慎重の好みから生まれる。(1918年)

オリンピズムとは人間の中に生成され内在する精神のあり方であり、クーベルタンの未来志向の教育論の命題である。それは人間によって対象化され構造化される即物的なシステムではない。努

力と調和、過剰と慎重という対立項の中間にある人間の心のあり方はスポーツ実践によって顕在化されると考えた。

○ オリンピズムは壁を取り去り、すべての人間に空気と光を与える。そして、誰もがアクセスできる一般的なスポーツ教育を主張する。それは男らしい頑張りや騎士道精神に縁取りされ、美的文学的表現行動を伴い、国民生活の活性化と公民生活の場を提供する。これこそが理想的計画なのだ。(1918年)

理想主義者クーベルタンの面目躍如たる言葉…。彼は人間への期待をオリンピズムという言葉にこめた結果、このように結構づくめの教育計画が提出された。これが理想であり現実ではないということ、そして理想は、過剰を恐れぬ努力によって少しずつ現実のものとなると考えた。クーベルタンはスポーツ教育の先駆者あるいは創始者と言うべきだろう。現代ドイツのスポーツ教育論者には、クーベルタンのスポーツ教育への貢献を軽視する傾向があるけど、方法論の精密化を除けば、根本において同じようなものだ。現代フランスの学校体育はクーベルタンのこの構想を具体化しているとも言える。

○ 人間は過去の遺産の中に、未来を構築するためにどうしても必要な力のすべてを求めよう。オリンピズムはそのひとつである。(1919年)

未来は過去の中にある。過去からのどんな道新しい未来への道として選択するか、それは恣意や偶然ではなく歴史のビジョンにかかっている。クーベルタンは専門的歴史研究者ではなかったが、歴史に造詣の深い教養人であり、当時のヨーロッパ知識人がそうであったように、その知的源泉はヘレニズムであった。

○ オリンピズムとは若者を物静かで自信のある人間にする儀式であり、(…) 恐怖心の克服である。勇気ではなく信頼であり、自信と物静さは表裏一体である。(…これこそが) オリンピズムの本質であり、そこが単なるアスレティズムと異なる。(…) 競技者は自分の努力を楽しむ (…)

この喜びは内なるものである。そこに自然の喜びと芸術の飛躍がかたちとなって現れると想像してみよ。(1919年)

クーベルタンは早くから、スポーツの理念型を"Le sport" (ル・スポール) と書いて、現実のスポーツ競技と区別していた。そして、ル・スポールの主人公は"Sportif" (スポルティフ：スポーツ愛好者) であり、このスポルティフたちがル・スポールによって自己変革をとげるものと信じられている。

○ オリpiズムは高貴さと道徳的純粋さの学校であり、同時に身体的持久とエネルギーの学校であると言える。ただし、常に筋肉的飛躍の高さで、名誉心と無欲の観念が高められなければならない。

クーベルタンはイギリス流のアマチュアリズムに対して、高められた「名誉心と無欲の観念」を置く。これをしもアマチュアリズムと呼ぶならば、彼のアマチュアとは《人間という職業》を持つプロフェッショナルだろう。この意味で彼はイギリス・アマチュアリズムを無意味な人間評価のルールと考えた。

○ 努力の儀式、危険を顧みないこと、祖国愛、寛大さ、騎士道精神、芸術・文学との接触、これらがオリpiズムの基盤である。

「努力の儀式、危険を顧みないこと」は、"Le sport" の定義に使われた言葉であり、「祖国愛、寛大さ、騎士道精神、芸術・文学との接触」はオリpiック競技会のあり方を述べる時、クーベルタンがしばしば使っている。

○ オリpiズムは教義として存在する(1928年)

オリpiズムというものが存在するからには、それは教義(教え)として存在している証拠なのだ、という意味である。

○ オリpiズムの力は単に人間であることに由来するのだから、本質的に世界のものである。(1932年)

人間であること、人間的なものに立脚するということは、世界に立脚することだと、クーベルタ

ンが述べる時、彼は人間的なものの普遍性を信じているということである。

○ オリpiズムはわたしの企ての一部にすぎない。半分ぐらいのものだ。(1936年、『未完成交響曲』草稿)

死の1年前の言葉…。彼の未来志向の教育論の中心的対象は児童ではなく青年であり成人である。オリpiズムは20世紀の青年教育のかけがえない原理であると、彼は信じていた。時代はナチズムの登場を知らせていたが、ナチの青年教育に対して、彼はどんな青年教育を構想していたのか、これが書かれなかった未完成交響曲の部分なのだろう。

教養

クーベルタンの教育改革構想は、後年、労働者の自主学习による《労働者大学》構想へと発展していく。彼はこの運動をUPUという機関を創設し、ほとんど独力で推進していた。オリpiズムとの関係では、特に、この運動の中で表明された人類文化遺産の労働者階級への財産分与という提案に注目しなければならない。

以下に掲げる彼の言葉はそれを明言していると言えるだろう。

○ 労働者に諦めを説くことは慎まれてきた。そして、労働者教育に従事してきた者たちは、ただ技術的・専門的観点でのみ彼らを教えようとしてきた。そうした教育はたしかに有益にはちがいないが、心を高めることがないし、高い生活に触れさせることがない。(1891年)

クーベルタンの初期の教育改革への関与の中から、スポーツ活動の中等学校への導入提案が生まれたのであるが、一方では、彼は教育制度全般への目配りをしていて、この文には、19世紀末に出てくる中等技術教育の拡充策への批判的視点が述べられており、いわゆる職業教育にも教養教育が必要であるという趣旨である。

○ 寺院の門を開け。すべての者が教養に触れるように。(1918年)

一般教養の基礎のひとつは、それが原則としてすべての者に触れることができるように追求されなければならない。しかもその適用が無限の発達にどうしても必要であるという点で追求されなければならない。(1929年、UPU)

○ 高い精神生活に参加する暇も手段もない成人は、[この未来] 都市に期待してよい。彼らはそこで、幅広い無償の教養に触れることが保障され、教養の各領域を駆け回るのはなしに、実利や専門を離れ、心行くまで教養の全体像をつかむことができるのだ。(1929年、UPU)

○ いかなる早熟な専門化、そして、一般教養との関係を考慮せず殻にこもって孤立するようないかなる教育も叩く必要がある。(1929年、UPU)

○ 知識に関する概念と知識そのものとは区別すべきである。(1929年、UPU)

知識は人間の遺産であり、その累積された量のすべてをそのまま全部インプットすることなどできない。したがって、人類の知的遺産を受け取るには、知的遺産の山の全体を鳥瞰する「知の飛翔」によって、全体の構造化する必要がある。

クーベルタンは、中等教育の知識教科のカリキュラム改革を提案するとき、このような考えにもとづいて教科内容の整理・統合を企てようとした経験がある。そこでは「知識に関する概念」とは知の全体を構造化する概念であり、知識そのものではない、という意味である。彼は後年、これを「ネオ・アンシクロペディズム」(直訳すれば新百科全書主義)と称した。

○ 労働者が教養を持つてはならないなどという理由はどこにもない。プロレタリアは目的としての絶対者を捨てるべきだ。方法としての暴力を捨てるべきだ

この言葉には、明らかに20世紀初頭の革命的労働運動への批判が読み取れる。「目的としての絶対者」というのは、人間以外の権力のものであり、それへの依存・奴隷化ということが懸念されている。

○ 知的労働は、文化的労働にくらべて手仕事事

働を常に低い地位に置くような千年の弊害を考えるべきだ。科学的にはこの弊害はまったく意味を失っているが、道徳的にはけっしてそうではない。

普遍性

クーベルタンのオリimpiズムには「普遍」という性格が濃厚である。

オリimpiズムのこの普遍主義は、クーベルタンのスポーツ観、歴史観、人間観のすべてを貫く第一の性格だといえるだろう。

○ オリimpiズムはローカルな一時的役割をはたすために近代文明の中に出現したのではない。オリimpiズムに託されている使命は、普遍的永続的な使命である。オリimpiズムはひとつの希望であり、すべての時間と空間を求める。(1913年、『Revue olympique』8号)

クーベルタンは、スポーツによる人間の教育の可能性・永続性をオリimpiズムという概念によって表明しようとした。この構想は彼のものであり、現実の国家的関心とは無縁のものであった。したがって、競技会の開催地は、アテネに固定することなど考えられなかったのである。彼にとって、現代ギリシャと古代ギリシャとの血縁関係には何らの普遍的要素を認められなかった。

○ オリimpiック的なるものは普遍的である。(…)人間の完成のために、完全なる平等のもとに結集する各種スポーツ間の触れ合いと協力関係なくしては、オリimpiック的なるものは望み得ない。(1910年、『Revue olympique』8号)

Le Sportという概念

先に示したように、クーベルタンのスポーツ概念は特別な意味を含んでいた。それは、彼の周囲の個別スポーツの愛好者たちには理解しがたいものであった。クーベルタン自身もそのことを強く意識しており、「絶対的誤解」が両者の間に存在すると明言している。

中日新聞記事【当日配布資料】の説明…「スポーツという教育ならざる教育」によって普遍主義

の立場から将来（20世紀）の《人間＝ユマニテ》を形成する人間形成の手段としてのオリビズムに到達したのである。

歴 史 性

先に述べた「知の飛翔」の考え方は、以下のような歴史論の文脈で確認できる。それは単なる歴史指導法に限られるものではなく、オリビズムの基本原則でもあったのである。

- 各国史は世界史との関わりにおいてのみ教えるべき…（1929年、UPU）
- 戦争というのはおおかた、歴史の無知から生じるものであり、この無知はかならず、教育の間違い、社会の計算違いを生む。広い景観に向けられる眼差しは、まず、地図の分析より先に全体を嘆賞する。（1918年）
- 世界史は《俯瞰的全体像》の学でなければならない。（『世界通史』1926年）
- わたしの望みは、競技会のまわりに折に触れて組織される知的表現の中に、歴史が有力な地位を占めることです。それは当たり前のことなのです。なぜなら、オリビズムは歴史に属するものだからです。オリンピック競技会を開催することは、歴史を書いているということなのです。（1935年、『Le Sport suisse』の記事「近代オリビズムの基盤」）

人間性（ユマニテ）・人間本性（La nature humaine）

ルソーとクーベルタンの人間性概念の比較考察については、別稿を用意したがこれには触れない。

【当日配布資料】

近代的人間観は人間中心（ヒューマニズム）と解釈され、地球規模の自然破壊が顕在化してきた世紀末から21世紀初頭には、すっかり色あせた観がある。しかし、クーベルタンの人間の概念は、生を超越する時間的歴史的な概念であるといえる。

『20世紀の青年教育』第3部「相互敬愛」の中

で、クーベルタンは、この地球上の《人間》のうち「死んだ者と生きている者ではどちらの方が数が多いか？」と問いかけ、人間の過去と現在という時間概念（歴史性）の拡張を企てている。彼が「人間」と言うとき、この点を読み込んでおく必要がある。

オリビズムの成果

以上、見てきたように、彼の普遍主義・理想主義の提案であるオリビズムの思想的手段としてのオリンピック・スポーツの近年の発展と変容は、クーベルタンの視野の中で展開していると考えた方がよい面もある。

今日のスポーツは、社会学者たちが口をそろえて述べ立てているように、文化の方向へ導かれている。そこには何らかの意図が存在する。そこには脱歴史・超歴史という野心が見え隠れしており、その背景には脱教育というイメージづくりの意図がありありと見て取れる。それは言葉のすり替えにすぎないのではないだろうか。言うなれば、宣伝という名の《教育》にはどっぷり漬かっているのではないかと思わせる感すらある。《みんなのスポーツ》《反戦キャンペーンとしてのスポーツ》《脱西欧化のスローガン》《女性スポーツの平等》《シニア・スポーツ》《こどものスポーツ》…、これらはすべて現代教育の中心軸につながるものであり、脱教育の契機としてのスポーツということにはならない。スポーツ研究の国際支援組織であるICSSPEがユネスコの傘下団体であり、文化と教育というキーワードが明記されている。スポーツは教育なしには存在理由を持ち得ないということは明らかなのである。

クーベルタンのオリビズムはまさに、「教育ならざる教育」なのであり、スポーツをテコにした人間と世界について20世紀的なひとつの改革原理であったと言えよう。20世紀から21世紀へと、人間も世界もスポーツも大きな曲がり角を迎えているとき、オリビズムの歴史的意義を再検討することは有意義なことではないだろうか。（完）

「21世紀のオリビズム・・？クーベルタンに訊く」を聴講して。

小石原美保

オリビズムという概念について

今年度より立命館大学で「スポーツの歴史と発展」という一般教養的な科目の講義（つまりスポーツ学専攻ではない複数学部からの一般学生がほとんど）を担当している。オリンピック復興をとりあげる内容のとき、オリビズムというのをどう説明すべきか、考えあぐねたが、清水先生のお話をうかがって、改めてこの概念の多義性、重層性を感じた。

オリビズムとは精神のあり方である。

オリビズムとは儀式である。

オリビズムとは学校である。

資料に並んでいたクーベルタンの文章を久しぶりに読んで、上の3つのオリビズムの定義にいずれも共通しているのは、オリビズムに、人間としての向上をもたらす契機としての機能を指摘していることだと思った。

クーベルタン自身、さまざまな言葉の置き換えによってオリビズムの概念を可塑性のあるものとしてとらえようとしている気がした。それこそメタフィクショナルなオリビズムであるような気もする。

芸術・文学との接触のところで「スポーツ作家協会」の話題にふれられながら、「選手が文学性を持ち芸術性を持つべきである」ということをクーベルタンはいおうとしたのではないかと先生はおっしゃった。私は、「芸術家や作家といった知識人たちがスポーツ性＝スポルティヴィテをもつべきである」という側面もこの協会にはあったと理解している。そして、彼らは観念としての「スポーツ」を考えるのではなく、スポーツを実践することでこの「スポーツ性」を理解し、その言説化を試みたのではないか、それはクーベルタンとある程度共有されたオリビズムの認識の一端だったのではないかと感じる。

教養について

とくに現在使われている「スポーツ文化」という言葉について、我々は脱教育という捉え方で安心しているところがないか、どうも胡散臭い言葉のすり替えに思われる、と先生がおっしゃったことを、目からうろこが落ちる思いでうかがった。「文化」という言葉の根幹の意味（教育を通じた伝承性、教養の大衆化というようなことを先生はおっしゃられたように思う。）に立ち返ることの必要を痛感しました。ここ数年「スポーツ文化論」などと題する講義を担当しながら、その意味について改めて考えることなどすっかり放棄していた自分に恥じ入った次第である。

中日新聞の記事をめぐって

20世紀の最初にクーベルタンは国民よりも人類を意識し、国民教育（いわゆる教育教育した教育）ではなくスポーツ教育（教育ならざる教育）を構想していた、という部分に、改めてクーベルタンという人のコスモポリタンのともいえる発想を感じた。ひるがえって21世紀を迎えた今、新しい世紀のオリビズムはどう志向されていくべきなのか、クーベルタンのような全体を俯瞰する眼からスポーツ思想を構想することがなかなか難しい今の時代状況に暗澹たる思いがする。先生が、かなり思いきったことをやらなければならないとおっしゃられたことがどういうことなのかを、今後の自分の宿題として考えていきたいと思う。

本研究は国士舘大学体育学部附属体育研究所の平成15年度研究助成により行なわれた。